

研究報告

エツ・スギモトの初期作品
— 日本文化の表象と作品の背景 —

水野真理子

1. はじめに

エツ・イナガキ・スギモト (杉本鉞子: 1872-1950) は、1920年代半ば、アメリカおよび西洋諸国で彼女の著作『武士の娘』(*A Daughter of the Samurai*) (1925) がベストセラーとなり、国際的な注目を集めた女性作家である。日本ではその功績があまり知られていないが、近年、彼女については、欧米諸国の読者に、日本文化や日本精神について流麗な英文で紹介し、異文化理解の促進に貢献したすぐれた国際人だとして再評価する動きが出ている¹。そして、『武士の娘』についてはもとより、彼女の出自や足跡、伝記的背景についての研究が進められている。また、彼女が新聞雑誌に寄稿した英文著作も、『エツ・スギモト (杉本鉞子) 英文著作集』(2013) として復刻され、研究の基盤が整備されつつある²。

再評価の機運のあるスギモトであるが、その一方、彼女の作品に関しては、おもに『武士の娘』に焦点が当てられ、それ以前の習作時代については、筆者の知る限りほとんど検討されていない。『武士の娘』が出版される1925年までの執筆活動は大きく三つの時期に分けられる。第一期は、1901年から1902年にかけてで、スギモトの渡米後はじめての執筆である。1901年3月17日、『シンシナティ・インクワイアラー』(*Cincinnati Enquirer*; 以下『インクワイアラー』と記す)に「古風な日本」(“Quaint Japan”)が掲載され、その後1902年6月まで、同紙には5点のエッセイが掲載された。また1902年6月から同年12月までは、ニューヨークの『ブルックリン・デイリー・イーグル』(*Brooklyn Daily Eagle*, 以下『ブルックリン』と記す)にも5点の作品が掲載されている。そして第二期は、スギモトがしばらく日本に帰国した後、再渡米してからの執筆で、1916年から1918年にかけてである。第一期と同様に、『インクワイアラー』には1916年8月から9月にかけて5点のエッセイ、またフィラデルフィアの『イブニング・パブリック・レジャー』(*Evening Public Ledger*)には1918年5月から8月まで7点の作品をスギモトは寄稿している。そして第三期は、『武士の娘』のもとになった雑誌連載で、1923年11月

¹ スギモトの研究は1980年代から長岡市の人々による歴史研究会(「武士の娘研究会」[長岡史楽会])を中心に行われてきた(佐々木佳子『「武士の娘」の周辺』『長岡郷土史』30号, 1993, 141-144; 青柳保子「杉本鉞子研究『武士の娘』に書かれなかったこと その一」『長岡郷土史』31号, 1994, 120-136)。青柳には『「武士の娘」の舞台裏 杉本鉞子の生涯を探し求めて』『アジア系アメリカ文学研究会』16号, 2010, 31-38など継続的に発表してきた一連の論稿がある。その後1990年代に入ると、地元の人々だけではなく、より全国的な研究者の目にも留まるようになり(平川節子「アメリカと日本における杉本鉞子の『武士の娘』」『比較文学研究』63号, 40-56; 大西麻由子「国際理解教育をめぐる今日的課題—日米文化間に生きた *A Daughter of the Samurai* の生活史を手がかりに」『慶応義塾大学大学院社会学研究科紀要』49号, 1999, 1-9; 内田康雄『鉞子—世界を魅了した「武士の娘」の生涯』(講談社, 2013)), また杉本との直接、間接的な関わりを持つ人々によっても、彼女の人物像や著作の研究がなされるようになった(多田健次『海を渡ったサムライの娘 杉本鉞子』(玉川大学出版部, 2003))。また地元メディアやNHKでも取り上げられ、スギモトの人物像が映像化されている(新潟テレビ21「杉本鉞子の生涯」1995年; NHK BSドキュメンタリー「武士の娘 鉞子とフローレンス—奇跡のベストセラーを生んだ日米の絆」2015年)。その他研究史については、植木照代『別冊 エツ・イナガキ・スギモト (杉本鉞子) 英文著作集』(エディション・シナプス, 2013)が詳しい。

² 植木照代編『エツ・イナガキ・スギモト (杉本鉞子) 英文著作集』(エディション・シナプス, 2013)。

から『アジア』(*Asia*)に11回にわたり『サムライ』の娘(“A ‘Samurai’s Daughter”)を寄稿している。こうした執筆活動において生み出された初期作品が、いかなる内容で、そしてどのような背景のもとで書かれ、また読まれたのかを探ることは、『武士の娘』で一つの頂点に達するスギモトの作品の評価、および受容がどのような流れにおいて起こったのかを理解するのに、不可欠なものであろう。

こうした問題意識のもとに、本小論では、まずスギモトの初期作品を読解し、そこに現れる日本文化論の特徴をまとめてみたい。そしてそれを踏まえながら、新たな新聞資料も加え、どのような背景のもとで作品が生み出されたのかを推察してみたい³。

2. 「武士の娘」スギモトの経歴

作品の考察に入る前に、まずスギモトの経歴を確認しておこう⁴。スギモトは、1872(明治5)年6月20日、旧長岡藩筆頭家老、稲垣平助の6女として新潟県古志郡川崎村地蔵町に生まれた。父平助は、宿屋、印刷業などで生計を立てていたが、1885(明治18)年、まだ14歳の鉞子ら家族を残し、50歳でこの世を去ってしまう。その後、鉞子が渡米することになったのは、15歳年上の兄、平十郎(別名: 央^{なかぼ})の影響が大きい。父が亡くなった翌年、渡米していた兄が帰郷し、彼は、アメリカでの恩人で、オハイオ州シンシナティで日本の美術骨董店を営む杉本松之助との結婚を鉞子にすすめ、鉞子も承諾し、二人の婚約が成立する。そして鉞子はアメリカでの生活に向けて、英語を学ぶために兄と上京し、華族女学校、海岸女学校、東京英和女学校で学び、1893(明治26)年、浅草の美以美小学校の教師となる。そして5年後の1898(明治31)年、同小学校を退職し、松之助の待つシンシナティへと渡った。結婚式の際、鉞子の介添人を務めたのが、彼女より16歳年上のフローレンス・ウィルソンであり、彼女はその後、鉞子の生涯の友となり、多大な影響を与えた。挙式後、夫婦はフローレンスと生活をともにする。1899(明治32)年、長女花野が誕生、1904(明治37)年には次女千代野が誕生し、幸福に包まれた家庭であったが、1908(明治41)年、松之助の営む美術骨董店「ニッポン」は倒産してしまう。さらに追い打ちをかけるように、鉞子と娘二人が日本に帰国中、夫は盲腸炎のため急死した。女手一つで子供たちを育てていくという厳しい人生が始まる。日本キリスト教婦人矯風会で職を得、またフレンド女学校で英語を教授した。娘の教育のありかたに悩んだ末、アメリカでの教育が娘たちには適しているのではと思い、1916(大正5)年再渡米し、ふたたびオハイオ州に住む。その後ニューヨーク市に移り、娘たちはそれぞれ進学して勉学に励み、鉞子は執筆活動に専念した。また1920(大正9)年にはコロンビア大学の日本語、日本文化史の講師となった。そして、1925(大正14)年、『武士の娘』をダブル・ページ社より出版する。翌年、日本に帰国後も執筆活動を続け、1932(昭和7)年『成金の娘』(*A Daughter of the Narikin*)、1935(昭和10)年『農夫の娘』(*A Daughter of the Nohfu*)、1940(昭和15)年『お鏡お祖母さま』(*Grandmother Okyo*)を出版する。第二次世界大戦の戦禍を生き延び、1950(昭和25)年、東京白金の次女の千代野宅で、78年の生涯を閉じた。

³ 本稿で扱うスギモトの寄稿文については、植木、『スギモト英文著作集』による。そのほかの新聞記事については、インターネットサイト (<https://news.paper.com>) でのデジタル新聞資料による。

⁴ 経歴については主に植木、『別冊 スギモト英文著作集』、16-30を参照。

3. スギモトの日本論にみられる特徴

では実際に、スギモトの日本論にみられる特徴、そこから何が見えるかについて考察してみたい。各エッセイの要約については巻末にまとめた。興味深い特徴として以下の三つを挙げたい。

まず第一点は、杉本の日本論が女性の視点から、そして女性読者を意識して書かれている点である。日本の行事や慣習の説明がなされるのだが、その際、女子のたしなみや美など、女子教育のためになされているという説明が、よく見受けられる。例えば、「古風な日本」においては、3月3日の雛の節句が取り上げられ、その祝いのための準備や様子が語られる。そこにおいて強調されているのは、女子の家事についての教育である。スギモトによれば、雛の節句の起源は2,000年前に遡るが、それが実際の教育の場となったのはここ200年ほどであるといい、エッセイの最初からそこに見られる教育的側面を強調する。そして、古くは、娘たちは、女中たちと互いに自由に交流するなかで、家事などを教わってきたが、封建制度が完成していくにつれて、家庭内における身分や立場の差も明確になり、旧来のような家庭的な事柄についての学びや習得がなされなくなった。そこで、女子たちが様々な点において、注意深く躰けられることの必要性が認識され、それはまた彼女たちを「役に立つ主婦として、美しい女主人として、また忠実な妻で賢明な母として」(a useful home mistress, a graceful hostess, a faithful wife and a wise mother) 教育するために、必要なことであるとスギモトは説明する。こうした意識にもとづいて、雛人形や雛飾りにもと成る漆器や家具は、アメリカの日本雑貨店に売られているような子供向け玩具ではなく、代々受けつづき装飾品として丁寧に扱われるべきものだと主張する。また雛の節句を祝う際には、客人を招くときの料理や作法も学ぶという。

また、女性の服装についても焦点が当てられている。後に少し触れるが、19世紀半ばから20世紀初めにかけて、アメリカの新聞や雑誌では、女性の服装についての特集記事がよく見受けられる。19世紀半ばの初期女性雑誌の売り物は、そこに掲載される「服の型紙」だったという。この時期は、アメリカにおいて女性雑誌を含む雑誌の出版部数が急激に増加し、センチメンタルな小説を描く女性作家の活躍、そしてそれを楽しみにする女性読者層の確立がみられた時期だった⁵。スギモトの掲載記事も、そうした機運を反映している。「日本の哀愁漂う悩み」(“Japan’s Pathetic Struggle”) (『インクワイアラー』1901年10月22日)は、その当時の日本で議論が盛んだったという、和装か洋装か、そしてどのような服装が適切かという問題をテーマとしている。記事の中央には、大きく三枚の絵もしくは写真が掲載されている。中央上には、天皇皇后両陛下とおぼしき人物が、従来の伝統的和装に身を包んでいる姿、中央下は「近代的パリ様式の影響」(The Influence of Modern Parisian Models)と説明が付されており、ウエスト部分が狭まり肩を出したドレスに、大きな花がついたベールをかぶる、皇族または華族と思われる女性の姿が載っている。その右に、「妥協案」(The Proposed Compromise)として、着物の打掛のデザインを残したまま、頭には西洋的なベールを若干日本風にアレンジしたものをかぶる女性の絵が掲載されている。こうした女性の服装を話題にするなかで、スギモトは、急激な近代化によって起こった社会的な変化のせいで、真の日本的伝統を知っていたはずの階級の人々がもはや上流階級ではなくなり、その一方、にわか上流社会へ躍り出た人々が、西洋的な文化と日本の文化を奇妙な形で合わせているという点を嘆きながら、しかし古くからある日

⁵ 亀井俊介編『アメリカ文化史入門』(昭和堂, 2006), 203-204。

本の真の心は変わるものでないと主張している。

第二点は、日本文化に対して、アメリカの読者の共感や興味が得られるように、読み手の理解に配慮している点である。ここからは、日米の文化交流を促したいというスギモトの希望が窺えよう。例えば、「日本のハロウィーン」(“The Japanese Halloween”) (『インクワイアラー』1901年10月27日)では、月見の慣習を説明する際、ハロウィーンになぞらえることで、アメリカの読者の興味を引くような工夫がなされている。ハロウィーンと類似している点としては、日本の月見が、梨や西瓜、葡萄など丸い野菜や果物を、団子や兔型に整えたさつまいものお菓子とともに供え、収穫に感謝する意図があること、また男の子たちが楽しい悪戯に興じることなどが挙げられる。また西瓜は、ハロウィーンにおけるカボチャのジャック・オー・ランタンのように、中がくり抜かれ、外側に木などの装飾的な絵が彫られ、提灯として明かりを灯すと説明されている。その一方、ハロウィーンとは異なり、日本の月見には芸術的、詩的な面があり、それは月の美しさを静かに鑑賞し、月明かりのもとで俳句や短歌などを詠み合う点を紹介し、記事にはその様子を描いた絵が中央に掲載されている。

また、いくつかのエッセイのなかには、フローレンス・ウィルソンを「友人」(my friend)として登場させている。実際に長岡に帰郷した際、フローレンスも同行したからでもあるが、日本文化に対するアメリカ人女性の反応を書き入れることで、それを読むアメリカの読者は、より感情移入することができ、また日米双方の文化的差異や共通点などが際立ち、読者の興味を引くのに役立つのではと思われる。「ミカドの国で」(“In the Land of the Mikado”) (『ブルックリン』1902年6月1日)においては、日本と故郷長岡へ向かうまでの道程において、ハワイから横浜に寄港し、スギモト、娘の花野、フローレンスの三人が、横浜の元浜町の宿「マツザカヤ」に宿泊した際の、部屋の様子や食事、また周囲の様子などを記している。朝食をどうするかが心を砕く点だったとスギモトは述べている。というのは「友人」はこれまで日本の滞在経験はあったが、その際は常に西洋風のホテルに泊まっていたため、日本的な慣習の宿に泊まるのは今回が初めてであった。そのため、スギモトは彼女が日本的な不便さに対してどのように思うか懸念していたようだ。しかし、スギモトの心配は取り越し苦労となり、「友人」はお膳の上に載せられたいくつかの小鉢、そこに盛り付けられた日本食を楽しみ、とても安堵したと書いている。またスギモトはお膳を前にしたときに、彼女が教わってきた日本のしきたりや躰などが蘇ってきたが、それと同時に、そこにはアメリカ文化にも見られる実用的側面という共通点も見たと述べている。あまり詳しくは言及していないが、その真意は、例えば各自に用意されるお膳が、テーブル代わりに也成了り運びやすく用意や片づけがしやすいなどといった利便性について、思いめぐらしたのではないかと推測される。アメリカ生活を経験しているスギモトは、里帰りした日本での文化に改めて接し、新たな視点からアメリカ文化との共通点を見出そうとしている。

第三の特徴としては、スギモトの作品にも、それまで作り上げられてきたような典型的な日本イメージが見られる点である。「ミカドの国で」の初めには、おそらく新聞社の記者によるスギモトについての説明書きがある。そこには、身分の高い出自であるスギモトが、「これまで決して語られたことのない日本の生活を記す」(In her letters, she is to tell of Japanese life as it was never told of before.)と記述されている。しかし、彼女の作品のなかには、これまでの外国人による日本論、紀行文に表れる典型的と思われる日本的な事象やイメージが同様に出現している。その比較対象として、ラフカディオ・ハーンの日本論を挙げてみよう。1901年以前までにハーンが出版したのは、『知られぬ日本の面影』(1894)『東の国から』(1895)『心』(1896)『仏の畑の落穂』(1897)

『異国情趣と回顧』(1898)『霊の日本』(1899)『影』(1900)『日本雑記』(1900)など多数ある。スギモトは「死者の魂」(“Spirit of the Dead”)『インクワイアラー』1901年7月28日)では8月13日から15日まで行われる夏の行事、盂蘭盆について、また「死者を偲ぶ悲しい儀式」(“Sad Ceremonial in Memory of the Dead”)『ブルックリン』1902年10月12日)ではスギモトの父の命日に行われた法事の様子を描いている。それらは、死者の魂を敬う日本的伝統行事、祭祀であり、こうした死者の靈魂を偲ぶという祖先崇拜の宗教的精神は、ハーンがまさに日本に特徴的な国民的精神として注目し、その内実を解明しようと試みてきたものだった。また、スギモトは「日本のハロウィーン」で月見の慣習を説明する際に、子供たちが規律をしっかりと守ったうえで、悪戯に興じなくてはならないのは、月の女神に対しての敬意を保つためだと述べ、日本人の慣習のなかに様々な神の存在があることを暗示している。このような、多神教の国だという点も、ハーンが日本に対して強い関心を示した点であった。また、桜の美しさ、人力車、横浜の宿に滞在したときの夜に聞こえた汽笛の音や、物売りの声、人や物が小さく輝いていて玩具のように見える点なども、ハーンが彼の紀行文で書いてきた日本表象と共通する側面がある。さらに、道が箒で掃いたように綺麗だと、日本人の清潔さについてスギモトが再認識し、逆カルチャーショックを受けているところも、ハーンが日本の清潔さに驚愕の目を向けていた点と相通じている。スギモトがハーンの著作を意識してエッセイを書いたかどうか、その点について明らかにする必要があるが、少なくとも読み手は、スギモトの作品にハーンの日本文論でも見受けられたものと同じ表象を見出し、神秘的で妖精の国のようだとハーンが表現した日本のイメージをさらに強めたのではと考えられる。

4. 作品執筆の背景

それでは、上述のような特徴を持つエッセイを執筆したその背景はどうだったのだろうか。なぜスギモトは『インクワイアラー』や『ブルックリン』に記事を投稿し、採用されたのだろうか。またどのような読者が存在し、また当時の日本の印象はどうだったのだろうか。このあたりの詳細な事情はまだ調査中であるが、判明している範囲でまとめ、また留意すべき点、関連があると考えられる点を挙げてみたい。

第一に、スギモトの執筆に影響を与えた重要な存在は、言うまでもなく彼女の親友フローレンス・ウィルソンである⁶。フローレンスの援助や人脈などが、スギモトの執筆と新聞への投稿を可能にしたと思われる。フローレンスは、シンシナティでスギモトを迎えたオーベット・ウィルソン夫妻の姪(ウィルソン氏の兄の娘)にあたる。当時夫のオーベットは72歳、妻アマンドは66歳であった。オーベット夫妻は教科書出版事業で財を成し、教会や大学などにも多額の寄附をするなど慈善活動家として地域の尊敬を集めていた。海外旅行の経験も豊富で、1887(明治20)年日本を訪れ4、5か月滞在し、それが契機となったのか、親日家であった。その旅行に姪のフローレンスも同行し、彼女も日本に対して興味関心を持つようになり、日本についての書物はほとんど読むほどになったという。大学時代の彼女は、ニューオールバニーにあるデポー女学院(DePauw College for Young Women)で学び、特に英文学とシェークスピアを研究していた。内田によると、当時のアメリカの大学では、選ばれた学生が卒業式でエッセイを朗読するのが慣習だったという。成績優秀だった彼女は8名のうちの一人に選出され、「女性の

⁶ 内田義雄は『鉞子』において、フローレンスを含めスギモトを支えた周囲の環境についても目配りをして論じている。フローレンスについてはとくに内田、『鉞子』131-156に詳しく述べてある。

王国」という題のエッセイを読み上げた。その内容は、家庭における女性の役割の重要性を強調するものだったという。そこには、スギモトの抱く女性観と相通じる点があり、二人が意気投合する理由であったと考えられる。また作家志望だった彼女は、「シンシナティ婦人出版倶楽部」に所属し、エッセイや詩などの執筆活動を行っていたという。また、フローレンスを含めてスギモトの周囲にあった女性たちのコミュニティも、彼女に多大な影響を与えたと考えられる。それはシンシナティのカレッジ・ヒルにあった「進歩クラブ」と呼ばれる文芸倶楽部で、会員たちは交代で各自の自宅でお茶会を開き、様々なテーマについて会話や議論を楽しんだようである⁷。彼女や彼女をめぐる周辺の事情については、重要でありながら、まだまだ不明な点が多い。どのような価値観や日本観をフローレンスが持っていたのか、また彼女の人脈、そしてどのように彼女がスギモトの執筆活動を支援したのだろうか。佐々木佳子によれば、スギモトの娘婿（次女千代野の夫）で福沢諭吉の孫である清岡暎一氏が、『武士の娘』の英文を読むとフローレンスによる表現だと思われる箇所が多くあり、この著書が二人の共著だと言ったほうが正しいとの印象を、「武士の娘研究会」で語ったことを紹介している⁸。このような二人の関係は、英詩人の野口米次郎と前妻のレオニー・ギルモアとの文筆における協力関係とも似ており、当時のアメリカにおける日本人が英語で作品を出版し、作家となって大成するためには、彼（女）らを陰に陽に支えたアメリカ人文筆家たちの協力が不可欠であったことを暗示していよう。

また、各新聞社において、なぜスギモトの作品が掲載されたのか、果たして日本文化論を読みたいという読者の需要があったのだろうかという疑問が浮かぶ。その当時の日本については、新聞においてどのように報じられていたのだろうか。試みにスギモトの作品が掲載された時期の新聞を調査してみると、彼女を紹介した興味深い記事を発見した。それは『インクワイアラー』1901年3月1日に掲載されている、「コミュニティ関連」(“Social Affairs”) という欄に載せられていた10行の記述である⁹ (写真1)。

つい最近、日本からシンシナティにやってきたエツ・スギモト夫人が「日本の作法と習慣」(Japanese Manners and Customs)と題する魅力的な話を昨夜、クリフトンのゴルフ愛好家クラブ(Golfers' Club)で行った。その話は多くの美しい日本の習慣や興味深い点が満載であった。主催者は、アレクサンダー・ルイス夫人、スギモト夫人、グリーブ夫人、バートン女史、フレッド・ヒンキー氏、E.モートン氏、スティール氏である。(筆者訳)

この記事は小さなものであるが、シンシナティに来て約3年後、すでに当地のコミュニティのなかに溶け込み、日本の作法や習慣について英語で説明し、さらにそれが会員たちに好意的に受け止められているのが窺える。同日の全12頁からなる『インクワイアラー』紙全体を見てみると、1面は殺人事件やマッキンリー大統領のフィリピン統治についてなどの注目すべきトップニュース、2面は政治、3面は町のローカルニュース、4面はスポーツ、5面は経済やビジネス関連、6面はさまざまな注目ニュース、7面は現代的トピックのニュース、8面は劇場などの娯楽について、9面は鉄道や農業関連、10、11面は広告や掲示板、12面は社会ニュースと広告という内容になっている。その7面に掲載されていたのがスギモトを報じた上の記事である。この紙面ではとくに「インクワイア

⁷ 内田、『鉞子』, 129。青柳保子はカレッジヒルの当時の様子を現地調査から探っている。青柳保子「杉本鉞子の面影をたずねて—カレッジヒルの人々」『長岡郷土史』2008年, 125-135。

⁸ 佐々木, 『武士の娘の周辺』, 142。

⁹ “Social Affairs,” *Cincinnati Enquirer*; March 1, 1901.

ラー最近の話題」(“Enquirer Review of Current Topics”)として特集記事「1世紀前のアメリカ的生活―女性の服装」(“American Life a Century Ago: A Woman’s Costume”)や、「女性の世界」(“In Woman’s World”),「女性がスクワイア・デュモント法廷で世間を騒がせる」(“Woman Creates Scene in Squire Dumont’s Court”)など女性たちの社会的活躍を報じる記事が頁を占めている(写真2)。女性読者を意識した紙面のようだ。スギモトの執筆を支え、その内容が充実したものになるよう促したのはフローレンスやカレッジ・ヒルのコミュニティだったと思われるが、加えて、この当時のシンシナティにおける女性読者の存在があったからこそ、彼女の記事が掲載されるという運びになったのではと考えられる。また、スギモトの話を好意的に評価している様子から、日本文化への興味関心が女性たちの間にあったことも推察できる。その点については、19世紀半ば以降、ヨーロッパに端を発したジャポニズム、そして19世紀末頃からアメリカの女性読者たちの間で人気を博したジャポニズム小説の影響などが考えられる¹⁰。

また、日本についての記事も、同時期の新聞に散見される。アメリカの一都市において日本の情報というのは、継続的に報じられていたようだ。たとえば、上述の記事と同日の6面に、「モーガン企業組合の理念に基づく日本帝国の製鉄会社、アメリカ的手法を調査」(“Based on Morgan Syndicate Idea Is Japan’s Imperial Steel Company. Agent Investigating the American Methods.”)の見出しで、八幡製鉄所の創業に尽力した、金属工学者の大島道太郎が技術研修のためにアメリカに訪問したニュースを報道している¹¹。日本が富国強兵を掲げ近代国家の建設に努力している姿を伝えており、当時のアメリカにこうした日本イメージが伝わっていたと考えられる。

同様に『ブルックリン』においても、スギモトの記事「ミカドの国で」が掲載されている同日の紙面に、日本の文化についてのかかなり大きな記事が掲載されている。それは「日本で行われるフェンシングは最も凶暴な娯楽」(“Fencing as Conducted in Japan Is a Most Ferocious Pastime”)という記事である¹²(写真3)。ここには日本の剣道(フェンシングと紹介されている)が、ヨーロッパのような、動く位置を一定に保ち、決まった伝統的な振りの形があるフェンシングとは異なり、より凄まじい、戦いのような娯楽であると紹介されている。竹刀を振り戦いに熱中する二人の様子が、写真付きで詳細に説明されている。その内容についての真偽はここでは問わないが、見出しにもあるように、日本の剣道が、アメリカ人読者にとって暴力的なものに映っており、それは日本の脅威的なイメージを読者に植え付ける可能性があったと思われる。ここには日本が1894年の日清戦争で中国を破り、軍事力を強化し台頭していく状況が、重ね合わせられているだろう。

また、『インクワイアラー』とスギモトとのつながりについて言えば、注目すべき事実がある。実はこの新聞社には、日本文化紹介者として著名だったラフカディオ・ハーンが、1874年から1875年まで記者として勤めていたのだ。ハーンは1871年に後見人だった大叔母が破産したことから、遠戚を頼り、イギリスを出て1879年にシンシナティに渡った。そして1872年から『インクワイアラー』の積極的な寄稿者となり、1874年には正社員となった。そして凄惨な殺人事件「タン・ヤード事件」によって、事件記者として名を上げた。当時のハーンはもち

¹⁰ アメリカにおけるジャポニズム小説、女性読者の存在、そこに描かれる日本表象については、羽田美也子『ジャポニズム小説の世界―アメリカ編』(彩流社、2005)が詳しい。

¹¹ “Based on Morgan Syndicate Idea Is Japan’s Imperial Steel Company. Agent Investigating the American Methods,” *Cincinnati Enquirer*, March 1, 1901.

¹² “Fencing as Conducted in Japan Is a Most Ferocious Pastime,” *Cincinnati Enquirer*, June 1, 1902.

ろん日本には行ったことがなく、日本についての記事など書いてはいない。しかし、その後のハーンの日本での活躍、書籍の出版などを、『インクワイアラー』の記者や読者たちが知っていたとすれば、彼や彼の著作を通じて、日本への関心が持たれ、それがスギモトの原稿に興味を示し、掲載するきっかけになったかもしれない。実際に『インクワイアラー』には、日本におけるハーンの足跡を報じる記事が2点見つかった。その一つが、「ラフカディオ・ハーン—かつてシンシナティで著名だった紳士の近況」(“Lafcadio Hearn: Whereabouts of a Gentleman Once Well Known in Cincinnati”) (1891年7月12日)である¹³。ここにはかつて『インクワイアラー』の著述家だったハーンが (Mr. Lafcadio Hearn, the litterateur formerly of *the Cincinnati Enquirer*), 日本の大学の教授として定住し、日本の宗教を研究していること、そして日本女性と結婚して西洋文明に別れを告げたということが報じられている(写真4)。文面から推測すると、おそらくハーンはニューオーリンズに住む彼の友人に、自身の近況について手紙を送ったようで、それがその友人から『インクワイアラー』社に届けられたようだ。また1904年の1月にも、ハーンの日本での消息を告げる記事が掲載されている¹⁴。ハーンとスギモトの間接的な関わりについてもより調査する必要がある。さらにはハーンとの関連に加え、このシンシナティにおける日本趣味ブームの状況、またもともとドイツ系移民が多いという特徴などから、移民や外国人に対する関心が比較的高かったのではないかという、シンシナティの土地柄の問題なども、スギモトの作品背景を考察するうえで考慮すべき点だと考えられる。それらの観点は、ニューヨークでの彼女の文筆活動においても同様である。

5. おわりに

以上のように、本稿ではまだ本格的な研究がなされていないスギモトの初期作品、とくに20世紀初めの第一期の作品に着目し、そこに見られる日本文化論の特徴、および彼女の作品が掲載されるに至る背景について、新たに発見した新聞記事なども交えながら、判明している範囲で推察した。今後、課題点、不明な点、調査すべき点について研究を積み重ねていきたいと思うが、スギモトの一連の作品に表れる日本表象や作品の掲載、書籍出版に至る背景の研究は、19世紀末から盛んになった日米の文化交流、そしてその際に作り上げられていった日本イメージの詳細や変遷を考察する際に、重要な要素であると考えている。前述したようなハーンをはじめとする外国人による日本表象、新渡戸稲造の『武士道』、ジャポニズム小説群、スギモトと同様にアメリカ人女性に執筆を支えられた野口米次郎、また西海岸を中心に作り上げられた在米日本人社会とそこでの文学活動など、これまで別々に取り上げられ考察が深められてきた文学をめぐる状況を、統一的に、また俯瞰的に研究し、その間に見られる直接的間接的なつながりを明らかにしていく必要があるだろう。習作時代を含むスギモトの執筆活動、および作品全体の研究は、そうした19世紀末から20世紀にかけての日本表象、異文化交流をめぐる研究の発展に寄与すると思われる。

水野 真理子

¹³ “Lafcadio Hearn: Whereabouts of a Gentleman Once Well Known in Cincinnati,” *Cincinnati Enquirer*, July 12, 1891.

¹⁴ “Where Is Lafcadio Hearn? The Questions Asked by Tourists in Japan,” *Cincinnati Enquirer*, January 28, 1904. ただしこの記事では、ハーンが日本のどこにいるのか行方がわからないという内容である。

富山大学医学部 (教養 : 英語)

本研究は JSPS 科研費 16K02485 の助成を受けたものである。

[表 1]

The Cincinnati Enquirer

March 17, 1901	<p>Quaint Japan: Dedicates This Month of March to Its Gentle Women Folk 古風な日本—この 3 月をしとやかな女性たちに捧げる</p>
<p>日本には各月に特別な祝いがあるが、3 月は雛の節句と呼ばれる祭りだ。この日だけが唯一、日本の女の子たちが兄弟よりも祝福される。起源をさかのぼれば 2000 年の歴史を持つが、現在の実践的な教育の形となったのは 200 年前からにすぎない。すべての女子たちが、役立つ家庭の主婦、奥ゆかしい女主人、忠実な妻、そして賢い母であるために、この機会をもって注意深く教育されることの必要性が考慮されてきた。アメリカで売られているのは異なり、日本においては雛人形は子供の玩具ではない。2 月の末から少女たちが、掃除、料理、飾り付けなどすべての雛まつりの準備をする。そのなかで少女たちは、どのように繊細な陶器や家具などを扱うか、料理を客人に振る舞う作法などを学ぶ。</p>	
July 28, 1901	<p>Spirit of the Dead 死者の魂</p>
<p>今月は奇妙だが美しい盂蘭盆、「帰ってくる靈魂への祝宴」が行われた。この祝いは亡くなった両親や友人に愛情や敬意を表すための祭りである。全体的におおよそ同じ形式で行われている。盂蘭盆はサンスクリット語で 1800 年前に仏教とともに日本にもたらされたが、この習慣は輸入された仏教と古来の伝統的な神道とが融合した、日本に起源をもつ行事である。町の通りには絹や紙でできた提灯がかかっている。個々の家では新しい着物を着て、ご馳走を準備し、床の間も飾る。13 日の日の入りの頃にはすべての準備が整い、黄昏時になると、提灯に火が灯る。そして神社の扉が開かれて人々が参拝に訪れる。盆の時期は召使いたちも主人から贈り物をもらう。物乞いたちもお盆の期間は施しを受ける。幸せと優しさの普遍的な精神は、地獄に住まう魂たちにも向けられる。寺では盆踊りも行われる。魂であるおしょうらいさまは 16 日の早朝まで滞在している。夜明け前には川、池、湖や海に人々が集まり、灯籠を流して来年の再会を約束し、おしょうらいさまと別れる。</p>	
October 27, 1901	<p>The Japanese Halloween 日本のハロウィーン</p>
<p>どの国でも見られるように日本にも収穫祭がある。古代の暦、太陰暦によると 8 番目の月の 15 日、太陽暦によると 9 月の満月の日に行われる。外国のハロウィーンと似ているがより芸術的で詩的な祝いだ。月のように丸い野菜や果物、団子がお供えされる。月に兔がいるという伝説から兔の形をしたさつまいものお菓子も作る。寺や山へ弁当を持って月見のピクニックにでかける家族もいれば、家で月見を楽しむ家庭もある。窓を開け放して静かに夜空と月明かりを楽しみ、月について俳句や短歌を詠む。田舎ではハロウィーンのジャック・オー・ランタンのように、西瓜の中をくりぬき、そこに蝋燭を灯す。14 歳から 20 歳の若い男性もこの祭りを楽しむが、若い女性はあまり楽しめない。むしろ「かぼちゃ」のようだと容姿をからかわれる場合もあり、苦痛である。また物惜しみをする農家にとっても、農作物を分け与えることが期待されるこの時期は苦痛である。</p>	

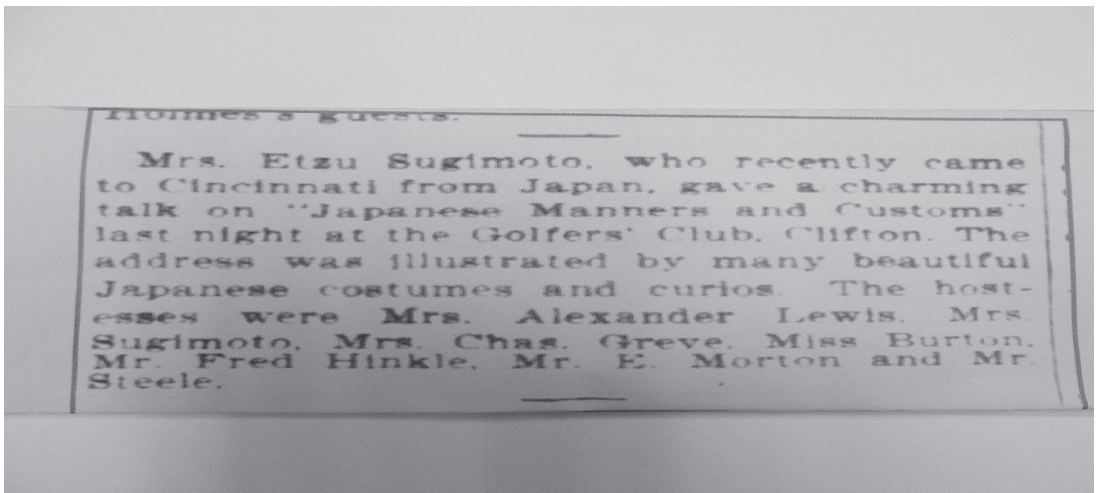
December 22, 1901	Japan's Pathetic Struggle 日本の哀愁漂う悩み
<p>日本は現在どのような服装をするべきかという点に非常に関心を持っている。この議論はペリーが日本にやってきた 50 年前から起こっている。武士は武器の扱いのしやすさを考えて洋服を着用するようになった。生活習慣の変化、海軍陸軍などの改善により服装も変わってきている。外国の人々は日本人が洋服を着用するようになったと理解しているかもしれないが、実際はそうではなく、家に戻れば着物に着替える。また東京や長崎では和服と洋服の混合がみられ、少女たちは洋装の髪飾りなどを付けたがる。日本は封建制度から急激に近代化し、階級の変化も急に起こった。にわかにな流階級になった人々には日本の伝統をよく知らないまま、洋装を採用している人がいる。日本の文化と西洋の文化のミスマッチが見られる。日本は新しい西洋文化への順応に急いでいるが、本来の日本的文化の良さは何百年も前から培われてきたもので簡単には失われない。</p>	
June 8, 1902	At Home in Japan 日本の故郷にて
<p>仏陀の誕生を祝う記念日のお涅槃が行われている。通りには多くの正装した子供たちが集まっている。シンシナイから来た友人と娘と一緒に寺へお涅槃の祝いに出かけた。お涅槃にちなんでは古い話がある。それは雑貨屋の美しい娘、14 歳のお七の逸話である。お七の家が火事になり、父が熱心な檀家であったことから吉祥寺の境内に家族はしばらく住むことになったが、そこで寺の敷地内に居住していた貴族の息子と恋に落ちた。数週間のち家が建て直され寺を出ることになり、無垢な少女お七は、もう一度火事になればまたその男性と一緒にいられると思い、わざと家に火をつけた。しかし意図的に火をつけた者は火あぶりの刑に処せられる。判事たちはその少女を不憫に思い彼女を救おうと試みた。当時法的責任が問われる年齢は 14 歳からだったため、裁きが行われる際に判事は「14 歳には見えないね」と言って罪を逃れる道を与えようとしたが、真実を言うことが美德と教育されてきたお七は正直に自分の年齢を答えてしまった。</p>	

The Brooklyn Daily Eagle

June 1, 1902	In the Land of the Mikado (『インクワイアラー』にも同日に同記事掲載) ミカドの国で
<p>サンフランシスコに寄港後 6 日経ち、横浜の元浜町にある宿、松坂屋に宿泊した。ハワイを出るときには、デッキは赤い花のレイをかけた人でいっぱい、音楽隊の演奏で見送られた。そして日本へ向かったが到着前日は嵐に見舞われ、富士山が見えずがっかりした。「妖精のようだ」と外国人が日本について表現するように、すべてが光っていて玩具のように見えた。人力車に乗って通りを行くが、開花を待つ桜や梅の枝が家の垣根から伸びているのを見ると、日本に帰ってきたという喜びにあふれた。通りは箒で掃いたようにすべてが清潔に見える。出迎えられた宿は素敵な部屋で床の間に掛け軸がかけられている。最初の夜は、通りに響く物音、通い船の汽笛やお餅売り商人の声などが気になった。アメリカの友人と娘とともに朝食を食べる。お膳が運ばれ日本の古いしきたりが一気に蘇ってきた。</p>	
July 6, 1902	Cherry Blossom Season : A Holiday Time in Japan 桜の季節—日本でのある休日
<p>今日私の心は「懐かしい故郷」の歌を歌っている。故郷の山々、谷、子供時代に私の世話をしてくれた召使たち、</p>	

<p>父の兜、そして唯一の私の母、これらに代えられるものは何もない。こうした気持ちは日本、アメリカ両方の娘たちにあるものだ。その間の差異はただ、アメリカの女性は自分の心情をうまく表現するが、日本の女性はそれができず静かに黙っている点である。4 年間は長い時間であった。久しぶりに帰ってきた故郷はずいぶんと変化していた。伝説にあふれていた村はビジネスが浸透した村になり、大小の地獄があると考えられていた近くの湖の土地も、アメリカのスタンダードオイル会社に買収されていた。花見の季節で日本中美しい桜が咲いている。名所は御殿山、東京芝神社、隅田川、玉川沿いの桜だ。私たち日本人は花を愛する人々だ。家の小さな庭も花でいっぱいになる。各花の美しい季節には、花を愛でる旅行者たちが行き交う。美しい色合いのよつめをアメリカの友人はとても喜んだ。すべての人が自然を愛し、その自然を詠む詩人であるのは日本人だけだ。人々は花見を楽しみ、俳句や短歌を作る。また日本の庭師は芸術家である。子供たちもお店で小さな箱庭を買う。</p>	
October 12, 1902	<p>Sad Ceremonial in Memory of the Dead: A Picturesque Japanese Custom 死者を偲ぶ悲しい儀式—絵画のような日本の習慣</p>
<p>命日の祝いについて話したい。父の命日の朝、村人たちが集まり、9 時までには庭も家の前の通りも、袴と大きな藁帽子を着用した人々でいっぱいになった。これらの衣装はかつては大名行列の際に着用されたものだが、今では葬式や法事のときのみになっている。お坊さんたちはそれぞれの階級を示す色の袈裟を着用している。お坊さんたちが先頭に立ち、行列を導いて寺に向かう。父の葬式の参列のときは胸がはりさけそうな悲しみであったが、この法事においては悲しみの行列ではない。寺院の階段状の祭壇には父の碑や蓮の花、供え物などが置いてある。お香を焚くのがこの儀式の最も魅力的な部分である。すべての村人が父を偲び讃えてくれる。お墓へ行く前には親戚たちが個室で精進料理をいただく。そして墓には水をかけて拝む。</p>	
November 30, 1902	<p>Wrestling Japan's National Sport レスリング 日本の国技</p>
<p>長岡では様々な行事が行われる。数週間前には 3 日間にわたる相撲の試合があった。3,000 人も収容できる櫓と相撲小屋が作られる。太鼓の音はその日の晴天を神々に祈るためのものだ。初日の早朝 4 時になると太鼓が鳴って相撲の開始を告げる。5 時頃までには準備を行う人々で通りは混雑する。私のアメリカの友人が、日本ではすべてが小さく華奢で、力士だけが唯一大きいものだと聞いた。力士たちは実際大きいと同時に機敏である。彼らの大きな体は天からの授かりものだと感謝し、誇りを持っている。力士たちに加え、審判たちもいるが、彼らはかつての有名な力士で引退した人びとだ。取り組みは 8 時に始まるが、人気の取り組みは後に取っておかれる。金持ちも貧しい人もみんな観戦に訪れる。東京で行われる相撲と地方で行われる相撲とは、その環境や見物客たちの様子が異なっている。</p>	
December 7, 1902	<p>Odd Old Time Wedding Customs Are Still to Be Seen in Japan 奇妙な昔の結婚式の慣習が日本でまだ見受けられる</p>
<p>日本の多くの祝い事のうち、結婚式が最も盛大で特徴的なものである。それは宗教的信心と詩的な考えと古代からの伝統的習慣の結集だからである。その詳細は都市部と田舎、また各階級では異なっている。しかし基本はすべて同じである。数年前に出席した結婚式のこと。日本では結婚は個人と個人の契約というより家と家との結びつきである。子供を結婚させるまでが親の務めと考えられているので、ふさわしい相手を探すことも親の責任である。習</p>	

慣や味の好みについても親たちは調べるのである。そして仲人が各家を訪れた時に、近所の人々はその家が結婚に向かっていることを知る。近年では若者同士のみで、ピクニックや芝居を観に出かけ、二人で会ってから結婚を決める場合もある。



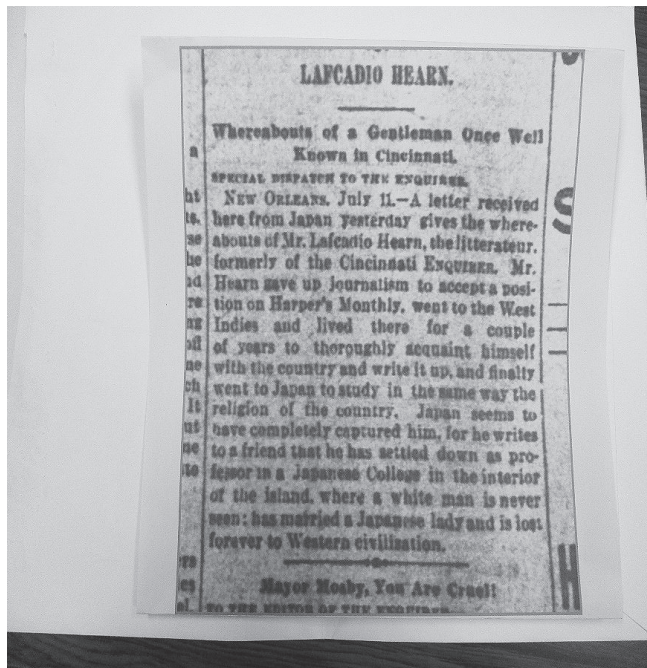
[写真1] 「コミュニティ関連」欄掲載のスギモトについての記事（『インクワイアラー』1901年3月1日）



[写真2] 同紙面にみられる女性のファッション特集記事『インクワイアラー』1901年3月1日)



[写真3] 日本の剣道についての紹介記事（『ブルックリン』1902年6月1日）



[写真4] ラフカディオ・ハーンの日本での近況を報じた記事（『インクワイアラー』1891年7月12日）